

平成30年 5月29日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11500

研究課題名(和文) オンコロジーナーズの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラム

研究課題名(英文) Educational program for cultivating nurses' practical knowledge through transfer of oncology nurses' practical knowledge

研究代表者

長坂 育代 (Ikuyo, Nagasaka)

千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授

研究者番号：50346160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究の目的は、日本のがん看護の領域で高い実践能力があると認められたオンコロジーナーズの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラムを構築することである。文献レビューの結果、プログラム構築では、看護の実践知がもつ特異性を考慮した実践内容の言語化、実践のリフレクションとフィードバックを含む計画された場づくりに焦点を当てることとした。実践知の効果的な伝承の方略として、臨床判断モデルの観点からオンコロジーナーズの看護実践の言語化を試みるとともに、エキスパートパネルディスカッションによりがん医療に携わる看護師に有用なプログラムを検討した。これらの知見をもとに教育プログラム暫定版を考案した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop an educational program for cultivating nurses' practical knowledge through transfer of practical knowledge of oncology nurses who provide high-level nursing practice in the field of cancer care in Japan. As a result of literature review we have decided to focus on the nursing practice visualization, considered to be the specificity of nursing practical knowledge, and the field creation including reflection and feedback. Therefore, we analyzed case examples of oncology nurses' practicing focused on nurses' clinical judgement reflecting the actual situation in cancer care. In addition, we conducted an expert panel discussion on the visualization strategies of nursing practice that we will use for educational programs including what practices can be and should be visualized. Based on these results, we developed the educational program provisional version.

研究分野：がん看護学

キーワード：オンコロジーナーズ 実践知 伝承 看護の可視化 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

(1)がん医療における専門職育成の現状

がん医療の高度化や専門分化、及びがん医療に対するニーズの多様化に伴い、医療者の高い技術とともに個別性に応じた質の高い看護の提供が求められている。2007年より施行されたがん対策基本法では、日本のがん医療水準の均てん化が基本理念に掲げられ、がん対策推進基本計画において、がん医療の専門的な知識や技能を有する医師や薬剤師、看護師などの医療専門職者の育成が推進されてきた。

このような背景から、がん医療の場において困難で複雑な健康問題を抱えた人々を病気と生活の両側面から捉え、治療（キュア）とケアを融合させた高度な看護実践能力を有する専門看護師や認定看護師が育成され、がん医療の質向上に寄与している。

しかしながら、2014年の統計によると、看護師の就業者数が約140万人に対して、がん看護専門看護師はわずか514名（0.0003%）であり、がん看護に関連した認定看護師（緩和ケア、がん化学療法看護、がん放射線療法看護、がん性疼痛看護、乳がん看護）も4,109人（0.002%）に過ぎない。そのため、多くの看護師が、がん看護専門看護師やがん看護に関連した認定看護師などの専門資格を有する、いわゆるオンコロジーナースの実践に触れる機会がほとんどないのが現状である。また、このようなオンコロジーナースの活動拠点は、都道府県のなかでも都市部に集中しており、がん看護の実践において地域格差が生じていることは否めない。

(2)がん看護における実践知伝承の必要性

わが国のがん罹患者数は年々増加し、2014年に新たにがんと診断される患者は88万人を超えるとされている。さらに、団塊世代が後期高齢者層を形成する2030年にはがん罹患者数は飛躍的に増加し、がん多死社会が到来すると予測されている。がん対策基本法の基本理念であるがん医療の均てん化を促進し、誰もが質の高い看護の提供を受けるためには、オンコロジーナースの実践知をがん医療に携わる看護師に広く伝承し、その知を活用して新たな実践知を創出できる人材の育成が急務である。

金井（2012）は、実践知を熟達者がもつ実践に関する知性であるとし、実践知の4つの特徴として、個人の実践経験によって獲得されること、仕事において目標指向的であること、仕事の手順や手続きに関すること、実践場面で役立つことを挙げている。また、Benner（1984）は、優れた看護実践の意図、予期、意義、成果は記述することができるし、臨床的ノウハウの様々な側面は、実際の業務を解釈して記述できると述べている。

熟練看護師の個人の経験の中で培われた実践知の多くは、それを言語化することの困難さゆえに個人のなかにしまいこまれ、潜在

化している。しかしながら、第3者が行為の意図を引き出し、意味づけられた行為を言語化することを通して、その熟練看護師が備え持つ実践知を伝承することは可能であると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本のがん看護の領域で高い実践能力があると認められたオンコロジーナースの実践知の伝承を通して看護師の新たな実践知を生み出す教育プログラムを構築することである。本研究では、プログラムの構築に向け以下の2点を明示する。

(1)実践知の伝承に繋がるオンコロジーナースによるがん患者・家族への看護実践の言語化の方略を提示する

(2)オンコロジーナースの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラムの構造を明示する

用語の定義

(1)オンコロジーナース：専門看護師もしくは認定看護師の資格を有し、がん看護の領域において卓越した看護の実践能力がある、あるいは熟練した看護技術と知識を有することが認められた看護師

(2)実践知：看護に関する専門知識と臨床における実践経験を土台にして、周囲との“関係性のなかでつくりだされるものであり、絶えず動いている現実のなかで、自分なりに共通善の価値基準をもち、個別具体的に存在する文脈のなかで、最善の判断・行為をすること（野中、2012）”

(3)伝承：熟練看護師の質の高い看護実践としてなされた行為の背景にある、経験を通して身についた勘やコツ、思考や判断などが他者に伝達され、それが他者の看護実践のなかで再創造されること

3. 研究の方法

(1)実践知の伝承を目的とした教育プログラムに関する文献検討

様々な専門分野の実践知の伝承に関する既存の教育プログラムの文献検討を行った。文献データベースは、医中誌 Web、CiNi Articles、CINAHL、PsycInfoを用いた。

(2)実践知を伝承するためのオンコロジーナースの看護実践の言語化の試み

実践知伝承の観点から、オンコロジーナースの看護実践を言語化する方略を検討するため、がん患者や家族への直接ケアに関するオンコロジーナースの看護実践の事例分析を行った。本研究では、実践知の効果的な伝承のための方略として、看護実践の言語化にTanner（2006）の臨床判断モデルを用いた。Tannerは、臨床判断を“患者のニーズ、関心

ごと、健康問題について解釈や統合を行い、アクションを起こすか起こさないかを判断し、標準的アプローチを使用するか修正し、もしくは患者の反応によって適切と見なされる新しいことを即興で行うこと”とし、臨床判断のプロセスには、気づき、解釈、反応、省察の4つの様相が含まれるとしている。

このモデルは、経験の累積から生まれる実践知を活用した臨床判断の思考過程を反映できるとされることから、看護師の個別具体的な文脈における判断・行為の内容を網羅することができ、実践知を伝承する上で有用であると考へた。

(3) オンコロジーナースの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラムの構造化

オンコロジーナースの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラムを構築するためには、その前提として、実践知の伝承に繋がる看護実践の言語化の方略の妥当性やがん医療に携わる看護師にとっての有用な実践知とは何かについて検討する必要がある。

そこで、実践知に詳しい専門家、がん看護学の研究者、オンコロジーナース、さらには看護実践の可視化に関心のある臨床看護師を交えたエキスパートパネルディスカッションを実施し、実践知の伝承に効果的な看護実践の可視化の方略を検討するとともに、オンコロジーナースの看護実践として可視化できる実践とは何か、またがん医療に携わる看護師に伝承すべき実践とは何か等について討議した。

4. 研究成果

(1) 実践知の伝承を目的とした教育プログラムに関する文献検討

多様な専門分野の実践知の伝承を目的とした教育プログラムに関する文献レビューを行い、日本において開発された実践知の伝承に焦点を当てた教育プログラムの構造を整理した。

その結果、プログラム構築では、看護における実践知がもつ特異性を考慮した看護実践の言語化、実践のリフレクションとフィードバックを含む計画された場づくりに焦点を当てることとした。また、言語化が極めて困難な暗黙知を主体とする看護の実践知を伝承するためには、単に暗黙知を形式知化することにとられない新たな伝承方法を見出す必要があることが示唆された。

(2) 実践知を伝承するためのオンコロジーナースの看護実践の言語化の試み

実践知の効果的な伝承のための方略として、がん医療における実際の状況を反映した看護師の臨床判断を記述することに主眼を置き、がん患者や家族へのオンコロジーナースの看護実践の事例分析を行った。

看護の実践経験が10年以上のオンコロジーナースを対象に、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。対象者に乳がん患者への印象的な意思決定支援について尋ね、Tanner(2006)の臨床判断モデルの観点から実践を掘り下げた。臨床判断モデルは熟練看護師の臨床判断のプロセスを示したもので、気づき、解釈、反応、省察の4つの様相からなる。得られたデータは、臨床判断モデルの4つの様相に沿って時系列で整理しコード化した後、各々の場面でなされた臨床判断の意味を解釈しテーマとした。

一例として、看護の実践経験が10年以上あり、乳がん看護認定看護師の資格を有するA氏の看護実践に関する事例分析結果を示す。

A氏が語ったのは、挙児を希望する乳がん患者の内分療法継続の意思決定に関するもので、30代前半の既婚女性で、乳がんと診断され、手術、化学療法、放射線療法の後、内分療法を2年継続している患者の「この薬って継続しなくちゃだめかしら」という問いに始まる1年間の看護実践であった。

乳がんは40歳未満の女性が罹患する悪性腫瘍のなかで最も多く、がん罹患後に挙児を希望する若年乳がん患者は少ない。乳がんの手術後、再発を防ぐ目的で行われる内分療法は、治療期間が5年以上という長期に渡るものもあり、またその薬剤の催奇性から、挙児を希望する患者は、再発のリスクを認識した上で治療を中断するか否かの選択が迫られる。

このような背景にある患者のA氏の看護実践として、A氏の臨床判断を表す48のコードから、次の5つのテーマを抽出した。

患者の治療継続の必要性に関する問いを患者の年齢や婚姻状況、これまでの治療経過、内分療法への妊孕性への影響に関する知識と関連づけ、潜在するニーズの端緒をつかむ

患者の挙児の可能性に関する情報ニーズに対し、病態と再発リスクに対する患者の認識や、これまで受けた治療の妊孕性への影響を把握した上で、資源を活用しそのニーズに応える最適な場をつくりだす

患者が抱えている迷いの本質とこれからの人生を見据え、挙児のことや治療継続について患者自身が“今”納得できるまで考える意味を患者と共有する

患者の疾患や挙児に関する配偶者の認識や周囲の影響を把握し、挙児希望が患者本人の意思であると確認した上で、患者の意思決定の過程に配偶者を巻き込む

患者は自ら決める力を持っているという前提に立ち、挙児のことや治療継続について患者自身が納得できるまで考える過程に最後まで寄り添い続ける

がんに対する治療を目的とした医療の場において、拳児を希望する乳がん患者のニーズは潜在化している。A 氏の看護実践は、患者に潜在するニーズに気づき、疾患や治療の側面と生活や人生の側面における患者の“これまで”と“これから”を踏まえて、関係する人々を巻き込みながら患者に必要なケアを提供するという実践知であり、患者自身が納得して治療に関して意思決定することを支えたと考える。

(3) オンコロジーナースの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラムの構造

実践知に詳しい専門家やがん看護の研究者、がん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師、がん性疼痛認定看護師などのオンコロジーナース、さらには看護実践の可視化に関心のある臨床看護師を交えたエキスパートパネルディスカッションを実施した。

臨床判断モデルを用いてオンコロジーナースの看護実践を掘り下げることが、実践知の伝承のための質の高い看護実践の可視化の手段となりうると考えると、(2)の成果を題材に、実践知の伝承に有用な看護実践の可視化の方略を検討した。

また、オンコロジーナースの看護実践として可視化できる実践とは何か、またがん医療に携わる看護師に伝承すべき実践とは何か等について討議した。その結果、教育プログラムに関して、以下の見解を得た。

研究者との対話による実践経験の共有は、オンコロジーナースの経験のなかに埋もれている質の高い看護実践を言語化する手段として有用である。

実践知の効果的な伝承のために、看護実践を可視化する方略として採用した Tanner の臨床判断モデルは、佐藤 (2007) の「看護師が臨床で用いる知」に近いが、そこから実践知をどう導くかは課題である。

看護実践を可視化する方法は、言語化に限らないが、言語化したものの一つに、標準看護計画やマニュアルがある。看護実践の何に焦点を当てどう言語化するかで、それがもつ意義が異なるため、がん医療に携わる臨床看護師に伝えるべき実践知とは何か、どのようにすれば伝わるのかを定める必要がある。

言語化された看護実践であっても、抽象度が高いもの、文脈や状況が排除されたもの、部分のみが示されたものは、情報が断片的になり看護実践として伝わりにくい。実際の文脈のなかでの行為やその前後の判断を、文脈を通して解釈し伝え合うことで、臨床看護師がリアルに伝わったという感覚をもつことができるのではないかと考える。

オンコロジーナースの看護実践とは何か、そのなかで臨床看護師に伝承する意義のある実践は何かを検討する必要がある。オンコ

ロジーナースの看護実践とそれ以外の看護実践とを比較するなどにより、オンコロジーナース独自の看護実践を示す必要がある。

これらを通して得た知見をもとに、臨床看護師を対象としたオンコロジーナースの実践知の伝承を通して新たな実践知を生み出す教育プログラム暫定版を考案した。これは、オンコロジーナースの看護実践を机上の役割モデルを通して学び、自らの実践とそのリフレクションから、自分のなかの実践知を見出すプロセスそのものを支えるというものである。

看護師にとって、物事を知ることとそれを自らの実践のなかに落とし込むこととの間には大きなギャップがある。本教育プログラムは、そのギャップを埋め、研究と実践を繋ぐ橋渡しの役割を担うものと位置づけられる。

本プログラムの展開は、施設における個人から個人への限られた伝承ではなく、広く確実に継続的な知の伝承が見込まれ、がん医療の場において、多くの人々が質の高い看護の提供を受けることに繋がると考える。

今後は、がん医療に携わる看護師に伝承すべき実践知や教育プログラムの評価方法を検討するとともに、院内教育などで広く活用できる教育プログラムに精錬させることが課題である。

<引用文献>

金井 壽宏、楠見 孝(2012).実践知 - エキスパートの知性.有斐閣 .

野中郁次郎(2012).知識創造経営のプリンシプル 賢慮資本主義の実践論.東洋経済新報社 .

Tanner,C.A.(2006). Thinking Like a Nurse: A Research-Based Model of Clinical Judgement in Nursing. Journal of Nursing Education, 45(6), 204-211.

佐藤紀子(2007). 看護師の臨床の「知」 - 看護職生涯発達学の視点から. 医学書院 .

5. 主な発表論文など

[学会発表](計 2件)

長坂育代, 増島麻里子, 眞嶋朋子: 拳児を希望する乳がん患者の内分泌療法継続に関する意思決定を支えたオンコロジーナースの臨床判断. 千葉看護学会第 22 回学術集会講演集, 39, 2016 .

長坂育代, 眞嶋朋子, 吉田澄恵, 井関千裕, 坂本理恵: 知って活かそう! オンコロジーナースの看護実践. 千葉看護学会第 22 回学術集会講演集, 54, 2016 .

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長坂 育代 (Ikuyo, Nagasaka)
千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授
研究者番号：50346160

(2) 研究分担者

眞嶋 朋子 (Tomoko, Majima)
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：50241112

増島 麻里子 (Mariko, Masujima)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：40323414

<平成 28 年度・29 年度>

吉田 澄恵 (Sumie, Yoshida)
千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授
研究者番号：10279630

<平成 28 年度>

井関 千裕 (Chihiro, Iseki)
千葉大学・大学院看護学研究科・特任助教
研究者番号：00736100

(3) 研究協力者

<平成 28 年度>

坂本 理恵 (Rie, Sakamoto)